

百とらずの伝説

その昔印旛沼に沿った部落に母親と二人暮しの、親孝行で年若な百姓男が住んでいた。身持ち行状もよく、家業に精を出し、それに亡父の残してくれた多少の金子もあり、楽な暮らしをしていたところ、或る年空から二、三日にわたり、灰が降り地面に二、三寸も積もるといふ変事があつた。この害によつて畑作物は全滅となり、また、この年の前後には印旛沼の大洪水があり、冷害などもあつて数年つづきの災害を苦にした母親は、ふとした風引きがもととなり長く病床に伏せることになった。農作物の収入はなく、有り金も使いはたし母の医薬の代にも事欠くようになったある日、若者は独り物案じにふけていたが、ふと考えてみると発病の当時診てくれた、佐倉町鐮木の老医者は、真に医は仁術なりとの言葉を実践される方であつたらしく、病気が良くなるらない時は支払いのことは心配せず、いつでも遠慮なく申してくるがよい、といわれたことを思い出しこれはどうしても、佐倉の先生におすがりするしか方法がない、と考えると矢もたてもたまらず、夕方から佐倉目あてに駆け出して行つた。

お医者の家につくと日はすでに沈む頃になつたが、幸いにしてお医者も在宅され、若者の願いを快よく聞いてくれ、薬料も後払いのことにして何日分か薬を調合してくれたほかに、数々の看病の注意や慰めの言葉をかけ夜道は暗かろうといつて、提灯（ちようちん）まで貸してくれたのであつた。

若者はそのありがたさに感激の涙を流しながら、厚くの礼の言葉を述べ、この薬を少しも早く母親に飲ませたい一念で、帰路を急ぐのであつた。

やがて本人はさがり松の入口に差しかかろうとした時、始めて淋しい難所に来たことを氣附いたのであつた。往路は氣も急いでいたし、未だ日も多少残っている時刻であつたので、さまで氣にも留めずに通りすぎたのであるが、今は真の暗やみとなつていたのであるから、恐ろしくぞくぞくと寒む氣を感じるような氣持ちで、ただ提灯の光りをたよりにでこぼこの道を、坂の中腹にさしかかつたところ、遠くではこんこんという狐の鳴く声も聞えてくるし、ますます氣味悪く思いながら足早に進んでいくと、前方に穴あきの一文錢がざつと百文ばかり、散らばつて目についた。日頃金に困つていた若者は、この金に心をうばわれて、つい今まで感じていた恐ろしさも何処へやら吹き飛んでしまふ。やれ嬉しやこれぞ神仏のお助けとばかり、これに手を触れようとしたときに、ふつと頭のかすめたものは、これは人様の落したお金、いくら自分は金に困ろうとも、これを拾い取つて我がものにするとは、人の道にそむくことになると思ひ返し、とつさに前方をみると首釣り人の足がぶら下つていたのである。これを見た若者はびっくり仰天、逃げるようにかげ出し息せき切つて、我が家に帰りつきほつとするとともに、心はずめいまのできごとを母に告げることは、母の病氣にさわることになりはしないかと案じ、胸に秘めた老医者の厚い志を語りながら、その薬を母に進めるのであつたが、それとともに落ちていたあ

の金は、死人の残した不浄の金であったことを感じ、今更ながら自分がさもしいい行いに、でなかったことを快く思い返すのであった。

しかし翌朝ともなると、待ちきれぬような気持ちで、近所となりの人々に昨夜の変事を知らせ、自分が百文の金を拾わずにきたことを、語り聞かせたところこのことは、たちまちに部落内外の評判となり、いつとはなしに百文の落ちていた場所をさして「百とらず」といいならわすようになったというのである。

叔母はさらにこれに附言して、「さがり松」というのは、大きな松の枝が道に枝をたれさげているさまを、呼び名としたものであって、松は竹や梅と並んで松竹梅といわれ、また歳寒の三友とも称されて、絵かきは好んで画題として用いて来たし瑞祥の木であり、しかも大きな松が枝をたれているさまは、幾とせを風雪にたえて来た老松の姿であり、この意味から考えても「さがり松」という名称は、奥床しくめでたい地名であって、首つり人が松の枝にぶら下っていたからということに、ちなんであつた名前ではないと聞かしてくれたのであった。

当時筆者は中学一年在学中の頃であり、また叔母は父の実妹であるが夫と死別し当時実家に隠棲中であつた者で、玉蘭と号し画筆に親しんだ前歴もあり、この物語りのなかにおいて、「さがり松」のことにつき画題にことよせて、説明するところがあるのは、その心得に基いて語ってくれたと思われるので敢て附記する次第である。

なお前記若者一家のことについては、病気の母も若者の手厚い看護により快復にいたること。その後若者の篤行によつて、一家幸運

に恵まれるという、餘話がつくのであるが本題とは関連がないので、これには触れないことにした。

(木内忠治郎)